

第一線の研究者と優れた書き手が最新宇宙論の面白さを語り尽くす

評者 須藤 靖

5, 6年前あたりから、第一線の研究者が最先端の科学成果を解説する書物（特に新書）が目立つようになった。ただし研究者本人に任せたのでは、前提とすべき読者層の知識をつかみかね、難解な内容になりがちだ。そのためだろうか、研究者がまずサイエンスライターに解説し、それをライターが書き下ろすスタイルも少なくない。忙しい研究者にとっては執筆に多大な時間を割く必要がない、読者にとっては内容がわかりやすくなる、出版社にとっては確実に本が完成したうえ、よく売れる。良いことづくめに思える。

宇宙の始まり、そして終わり

小松英一郎／川端裕人 著

日本経済新聞出版社

950円（税別）



しかし私は何か物足りない。そのスタイルが悪いと言うつもりはないが、研究現場の息吹というか、臨場感というか、こちらの心に訴えてくるものが失われてしまう気がしてならないのだ。

これに対して、本書は、第一線の研究者（小松氏）と優れた書き手（川端氏）が、互いの果たすべき役割を十分尊重しつつ、読者の代表が研究者の懐に飛び込んでとことん聞きまくるスタイルを採用したおかげで、絶妙なバランスの記述に仕上がっている。

本書の目的は、宇宙マイクロ波背景放射（以下CMBと略す）が示唆する宇宙の過去・未来像を語り尽くすこと、さらにそれを通じて研究の面白さを伝え尽くすことだ。そのための著者として、小松氏はまさに余人をもって代えることができない。東北大学大学院博士課程進学直後に、世界最先端のCMB探査機（後にWMAPと呼ばれるようになる）を開発していたプリンストン大学に乗り込み、その能力が評価され正式なチームメンバーになったにとどまらず、筆頭著者としてWMAPの成果をまとめた2009年と2011年の論文は合計1万回近くも引用されている。その後38歳の若さで、ドイツのマックス・プランク宇宙物理研究所の所長の一人としてヘッドハンティングされ現在に至る。まさに希有な人材である。

小松氏は、その科学的能力もさることながら、研究にかける情熱も半端で

はない。そのうえ、話し出したら止まらず、オチのない話を嫌う典型的関西人でもある（そのくせ、毎日必ず日記をつける習性があり、その記述を証拠として、あのとときこんなことを言いましたよね、といった他人の弱みを握りたがる陰湿な側面をも併せ持つ）。これほどキャラの立った研究者の話が面白くないわけがない。

当然、小松氏にすべて書かせてしまうと、メチャクチャ濃くなりすぎて読者が食あたりを起こしかねない。そこで川端氏の出番となる。個性の強い小松氏の弾丸トークをそのまま会話として引用しつつ、地の文では、川端氏が読者に代わって、それはどういう意味なのかとことん悩んで考えて理解を助けてくれる。おかげで、胃もたれすることなく最後まで読了できる。

実は、本書で説明されている項目にはかなり高度なものも含まれる。しかし、普通の解説本にありがちなごまかしを排し、小松氏はあの手この手で直感的説明を投げかけてくれる。といっても難しいものは難しい。そこで川端氏は、読者の代表として考え抜いた挙句、なるほどそういうことなのかと納得するまで食いついてくれるのだ。「教えて、小松さん！」というフレーズに象徴されるこのやりとりが素晴らしい。しかもこの調子で、CMBの偏光パターンなどという専門的事柄まで解説してくれるのだから、侮れない。

というわけで、内容的にも、スタイルとしても、極めてユニークな最新宇宙論解説書としては是非ともお薦めしたい（強いて言えば、売り上げを意識した結果なのであろうが、内容とタイトルのミスマッチ感だけは残念）。

（すとう・やすし：東京大学）